

日本神話の構想に關する二三の準備的考察

蓮 田 善 明

(一)

「日本神話」を取扱はうとする場合、その概念や範圍等について未だ學界は明確な答へをなしてゐないのみならず、明確な答へをなす方法も殆ど考慮してゐない。一般的には、所謂記紀「神代」の部分をも日本神話と稱して取扱つてゐるが、その史實的反映の著しいところから、特に「神代史」（津田左右吉博士）とか「古史神話」（高木敏雄、松村武雄博士）と稱されてゐることもある。それでは、神武天皇代の傳承には、所謂人代的な古史の要素のみが残つてゐるかといふと、この神武天皇代傳承は神代とつながり、相互つてゐるのみならず、相當に神話的要素が豊富である。寧ろ、神と同殿同床（古語拾遺）であらせられたのが、崇神天皇（ハツクニシラススメラミコト）の御代に分離せられ、こゝに西田直二郎博士の所謂「人の國」が始まつた（日本文化史序説）といふ見界に従へば、神武天皇（神武天皇もハツクニシラススメラミコトであらせられた）代の傳承などが豊富に神話味をもつてゐることは怪しむに足りない。神話なるものゝ定義にもよることであるが、とにかく「日本神話」を、單に「神代」傳承に見ようとするならば、あやまりである。私は日本神話のありかたについては體系的にその本質を明かにすべきであると考へて居り、それも別

に纏めるつもりであるが、しかし「神代」なるものはまづ第一にその本質を明かにすべき部分であらうことは疑ひない。我々はそこに大和朝廷オホヤマトの、換言すれば大八洲國の主なる大和朝廷の祖神、大八洲國の生成神、及びその前提としての天地初發の神が物語られてゐることを認め、且つその祖神によつて大八洲國が大和朝廷のしり、給ふ國土となつた経緯が語られてゐることを認める以上、そこに、「神代」神話の主題と構想とを認めざるを得ない。

この小論に於ては、さうした神代神話の成立についての準備的考察の二三を述べてみたいと思ふ。

(II)

まづ記紀その他により、夫々の神代傳承を比較して、一つの筋を掲ぐべきであるけれども、紙數の關係上それは略したい。唯記紀に於ける傳承の大きな差は、伊邪那美命の神カミヤマト、伊邪那岐命の黄泉國往還、阿波岐原の禊祓、須佐之男命の大氣津比賣殺戮、須賀宮造り、須佐之男命の神裔、大國主命に關する傳承、天孫降臨に於ける狹田毘古神、五伴緒その他の諸神の隨從、石長比賣、等の古事記の傳承が、書紀の本文或は一書に於ても欠け、又は略されて居ることを注意するにとゞめたい。

さて、この神代傳承を解説するに起點を見出したい。諸學者は、神代を純然たる史實と認め得ず、政治的なモチエモチエイヴの反映せる傳承と認めつゝ、而も解説を一律に天地初發から始めるのを通例とする。しかしこれは寧ろ逆であつて、たとひ「神代史」といふ立場で見るとしても、學的方法としては、天地初發から始めることは起點をあやまつてゐるといふはなければならない。單に宇宙史を自然史的に考へる場合或は世界觀の構造を論理的に考察する場合と、傳承の場合とは明かに區別しなければならないことは言ふまでもない。

我國建國の神話は、傳はる所によるに、天地開闢の神話と、國土生成の神話と、祖神の神話の三段をなしてゐる。

一は天御中主神をもとし、二は伊弉諾、伊弉冉二尊の御事をもとし、三は天照太神の赫ける出現となつてゐる。神武天皇の國家の創始は、太神の神勅によつて動きなき基を立てられたのである。歴史書に載れる上には、

三者は相つゞき來るが、精神發展の事實としては、逆に、國家的自覺が高まり、それより、祖神、國土、天地開闢の觀念が強まると考へられる。(西田直二郎博士「日本文化史序説」二〇八、九頁)

彼の天照大御神・月讀尊・素戔鳴尊よりも前に下界の島々までを作られたことになつて居るが、これは後になつて語部等に傳へられたものではなからうか。人類學上からはさう思はれるのである。(鳥居龍藏博士「人類學上より見たる我が上代の文化」一一九頁)

私はその第一の起點として、まづ時間的起點を求めてみたい。

いふまでもなく、時間的起點とは、この日本神話が、かゝる傳承的な構成を最も強く必要とした動機の發生してゐる時に先づ求めなければならない。そして、かゝる時期として、神話の上に暗示されるのは次の四つの主題である。

- 一、伊弉那岐・伊弉那美二神の大八洲國生成の時、
- 二、天照大神の天石屋戸よりいでまして最高絶對神としての神格を發揚されたる時、
- 三、高天原の神が葦原中國を言向^{コト}け^タへられたる時、
- 四、神武天皇の御東征完成の時、

即ち大和朝廷神話の最も大きなモチーフとしての政治的な重要時機をこれらに見出し得ると思ふのである。勿論神話は、さうした政治的動因のみによつて生れたものでなく、又右に擧げた四つの時に夫々一齣づつ出来たものといふでもない。又神話にひそむ時間的關係の内容として、生産形態の發達段階に於て狩獵漁撈經濟と農耕經濟、山住みと沿海生活の重り合ひや混在、社會制度に於て、母系制と父系制、末子相續と長子相續、呪術宗教の信仰に於て、吉事祓と凶事祓、家々・小地域・國家的靈威や神格の混在、大地的宗教と天界的宗教の並存、「ち」「たま」「かみ」の複雑な重り、といふやうなところにも時間的な據點を見出し得る。(松村武雄博士「神話學論考」中「日本精神と民族文化」)

しかし、全體的觀點からみた日本神話は、すでに「最高度に凝集性・求心性」を示して居り、(同博士「神話學より見たる國文學」岩波講座日本文學)

どこまでも政治的・國家的であつた。それは文學や宗教に閉ぢ籠めらるべく、餘りに事實性の重要視に傾向し、國家と皇室とを目標として、中心を明確にうち樹て、一切のものをこれに歸趨させようとした求心的精神が、強烈に神話に働きかけた。かくてあらゆる人文神話は、さうした意義に賦彩せられるか、若くはさうした意義を發揚し目立たしめるべき脇役を與へられ、天然現象の説明にすぎぬ自然神話は、政治的に一の中心を確立しようとする精神そのものの迫力、若くは該精神の下に活躍したとされる神々の人文的事業を説く神話の迫力を弱め妨ぐるものとして自らなる論議を餘儀なくさせられてゐる。(同上)

といはれるやうに、所謂日本神話は、大和朝廷・日本國家の神話として強力な構成をなしてゐるのである。更に、松

村博士が左のやうに述べて居られることは、この點について相たすくべき説明である。即ち「わが神話文學に顯著なる形相」の第二として、

第二は、その歴史的情感を基底とする血族的系譜觀念である。

として、それは「民族が或る程度の高い文化に到達すると」起るものであることを述べ、

第三は、該文學に現るる靈格が、質的にも量的にも、高度に「人態的」である。

として、その起因の最大なるものを、そこに展開する神話が、大きな程度に於て實際に史的事實であつたか、若くは信仰的に史的事實と考へられたこと」であると述べてゐられる。かゝる特殊相は、大和朝廷神話として、恐らく根本的のものであらうといふことは、考へうるところである。

私たちは、右のやうな「或る程度の高い文化に到達」した「高度に人態的」である特殊相を、文化史的發展段階に徴して之を定位することによつて、神話の成立過程を明らかにすることができる。

神話が、祭政一致的（時代によつてその程度に變化はあるが）な社會の間に生成することは言を俟たないが、それについて是非考へておくべき一つの事實がある。それは「古語拾遺」の次の記事である。

當此之時（神武天皇代）帝之與神、其際未遠。同殿同床、以此爲常。故神物官物亦未分別。宮內立藏、號

曰齋藏。……至于磯城瑞垣朝（崇神天皇代）、漸畏神威、同殿不安。……是命踐祚天之日。所獻神璽鏡劍也。

仍就於倭笠縫邑。殊立磯城神籬、奉遷天照大神及草薙劍。令皇女豐鍬入姬命、奉齋焉。又六年、祭八十萬

群神、仍定天社國社及神地神戶。始令貢男彗之調、女手末之調。

これについて西田直二郎博士の前掲書の論をもう一度借引したい。

西田博士は我が古代史の文化史的段階を先づ「神人融合」の時代に認められる。次に來るのは「神人分離」である。

神人分離——即ち崇神天皇代に、「今まで殿を同じうせられた天祖の神靈を大和國笠縫邑にうつし祀られたこと」に、
 「人間界の開闢」を見、崇神天皇を稱へた「初國知らす天皇」に、「遙かに、神の心を心として大和民族の國家を建て給ふた神武天皇の「始馭天下之皇」と同じ御名にて謂し奉る」ところに、「人の國家」の始めを見、同天皇代に「人民を校へて調役を科す」ところに人民意識の鮮明と、「神への置つ物」が「課役」の觀念のきざしへ進み、「池溝の開鑿」に、天の自らなる恵以外に人の所爲が天皇の徳を表してゐると見られ、「人が自然の上にその力を振ふて來た」ことを認め、
 又「天社國社の區別」を立てられたところに「神を神として、神の世界や、その神聖性を明らかにしたものに相違なく天社國社の制はとりもなほさず、地上の國家組織の發展し、層位的秩序の精神が進んだためである。」而して「人は今や神にさへ働きかけるものがあつたのである。」として、更に「氏族制度はまたこの點から考へられる」とて、

古代に於ける神人の分離の精神過程は、近代の精神が、その懷疑の立場に於て、神を否定し、人間の世界より神を放ち逐ふたとは異つて、神を信ずることのために神の分離がある。神から睽離隔絶するので決してない。かくて古代の神人分離は神をいよ／＼明らかにするにあつて、却つて究極には神への結合を有つてゐる。「離して却つて結ぶ」ところの矛盾性が見うけられるものである。かかる深い意味に於て、氏族制度は、人の集團が神に繋がり結ばれてゐる。(中略)遠く距てる祖神にかけて同胞の意識を成立させてゐるのである。従つてまた同胞性の意識の高まることはたゞ祖神の實在することのみでなく、祖神の血を承けてある氏の上なる人の存在によつても強

められてゐる、(中略)ゆゑに、氏族制度は、一は氏の祖神なる氏神の信仰、一は家長的集團の結合となつてゐる。而して上代國家組織はこの氏族制度の生活内容と異らざるものである。換言せば日本上代の氏族制度の觀念には國家の觀念がそのまゝ反映し、國家意識は氏族制度的國家と云ふならば、氏族制度に於ける神と人との關係が、國家にも深く入つてゐるのである。(中略)氏族制度を支持してゐる基本の精神は、これを歴史的^レ精神と言へる。この説明に於いて指摘されてゐる崇神天皇代の文化史的特殊相は、さきに掲げた松村博士の所謂わが神話の三つの特殊相と、ゆくりなくも一致する。もし然りとせば、日本神話傳承完成の根本的モチーフの時間的據點として、崇神天皇代を重要な豫想として加へねばならなくなる。私は先に、重要な時間的起點として、神話内容上四つの重要な主題の場合をあげたが、今又崇神天皇代といふ、豫想外の一つの場合を加へることになつた。先に註として掲げた西田博士の所謂「逆に、國家的自覺が高まり、それより、祖神、國土、天地開闢の觀念が強まる」といふ説も思ひ合はすべきであらう。

尙、記紀は、西田博士によれば、大化改新をその代表的契機とする「論理の世界」としての貴族的文化の時代を経て「舊來の氏族制度を改變させた、」そして「原則としては、往時の神につながる支配的權力、あるひは一般神話的なものは認められなくなるのである。」といふやうな欲求から編纂せられたものである。かゝる時代は必ずや古神話傳承の上に大きな變改を與へてゐるにちがひない。日本書紀はこの時代精神を強烈に反映してゐるものであるが、果して、先に述べたやうに、日本書紀は所謂出雲神話その他の點に意識的に大きな變改を試みてゐる。或は又、書紀に「泉津平坂^{つひらさか}」について「復た別の處所有らず、但、死に臨みて氣絶るの際を是れ謂ふか」などと後註がある。これは宣長

などが「漢籍の辭」として排したところである。これも書紀的延長の一例と見られる。然らば、我々は、神話の一つのモータイズを崇神天皇代にも認めることの奇異さに驚くにとゞまらず、かゝる後代にも一つの據點を見出さざるを得ない。しかし斯くいふのは、神話が動的に發展するものであるといふことを言はうとするのである。否、今日までも、神話は發展變改を止めてゐない。しかしこゝでは記紀の記載に至るまでの範圍にとめておくことにしたい。尙、さらに、次に空間的・勢力的據點を考察しつゝ、時間的據點の究明を補つて行きたい。

(III)

日本民族の成立、及びその原郷についての人類學的研究に於て、北方・南方等に種々の足跡が拾はれてゐることは事實であるが、日本民族として成立し、日本國家としての成立の神話の空間的據點はやはり日本國土内に求められなければならない。この方の豫想から云へば、

一、高天原

二、大八洲國

三、日向

四、大和

等があげられる。次にそれを考へてみたい。

高天原は、垂直的世界觀に於ける天つ神のいます所で、中つ國及び根の國、底つ國等と對するものである。しかしこれは神話そのものの世界である故、暫く除いて、現實の地理的據點を探つてみたい。

先づ注目されるのは、大八洲國である。これは、別に葦原中國、豐葦原之千秋長五百秋之水穗國等々と呼ばれてもゐるが、それは漠然と謂はれてゐるにすぎない。やはり問題となり得るのは大八洲國の地名である。否それも單に大八洲の地名を列擧してあるのではなく、その列擧の順序が或る意味をもつ。古事記では「大倭豐秋津嶋亦名天御虛空豐秋津根別」即ち所謂本州島を以て殿りとし、その名も他に比べて最も讚美的であることは、この本州の意識の強さを反映してゐるといふべきであり、日本紀本文では、「大日本豐秋津洲」を筆頭に擧げてゐるが、共に本州の意識の主要さを暗示してゐる。そして淡路洲を胞としたと言ひ、(日本紀一書第七、八は淡路洲を筆頭にしてゐる)各傳承を比較してゐるに、淡路洲から四國九州の順になつてゐる傳承が多い。最初の國土にして伊邪那岐・伊邪那美二神の降られた淤能基呂島も今その實際が何れであるかは結局不明であるが、仁德天皇の御歌に

おしてるや 難波の崎よ 出で立ちて 朕が國見れば 淡島 淤能基呂島 檳榔の島も見ゆ 佐氣都島見ゆ
とあるやうに、大體の位置は察せられる。又、オホヤマトといふ島の名は、大和といふ帝都所在の地名が、そのある本州島に冠せられ、やがて又大八洲國全體の名稱ともなつたものであつて、以上により、國土生成の神話が、略々、神武天皇の帝都大和地方を中心として(大和といつても後世の區劃を以て直ちに當てることは危険だけれども)、傳承の起點があることが察せられる。

次に伊邪那美命が火神を生んで神避り給ふと、その黃泉國と葦原中國との境界は、出雲國の伊賦夜坂といはれる。伊邪那岐命は伊邪那美命を訪ねて逃げ歸られたのであるが、後に淡海が多賀に鎮まれた。出雲風土記に夜見島・黃泉之坂・黃泉之穴などの地名が多いのを見ても、逃げ歸られたのは、出雲の方へ、ではない。近畿の方へ(但しこの

時は、筑紫の方へではなかつたかとも見られるが、詳論を省く。逃げ歸られたのであることは察せられ、ここにも近畿方面が傳承の意識上の起點と考へられる。(尙後説参照) 伊邪那岐命の御涙に成りませる神は、香山の畝尾の木のもとの泣澤女の神。伊邪那美命を葬つた所は、出雲國と伯伎國との堺なる比波之山(古事記)、又は紀伊國熊野の有馬村(書紀)ともいふ。伊邪那岐命が火神を斬られた場所は天安河であつた(書紀) 安河は近江國にある。

次に伊邪那岐命のみそぎは、古事記によれば、筑紫日向橋小門の阿波岐原であつたが、書紀一書(第十)によれば「往きて粟門及び速吸名門を見そなはず。然るに此の二門、潮既に太急。故れ橋の小門に還向いたまひて」とある。速吸名門の位置は神武天皇の條で、記・紀に相違があるけれど、とにかく、粟門速吸名門の順路は、もし橋の小門が筑紫日向の國にありとするならば「還向」の順路と矛盾するわけである。これについては、私たちはとりあへず二つの起點を認めておくことにしよう。一つは日向を起點とし、一つは粟門の方即ち(近畿の方)を起點とする。そしてこのみそぎが筑紫の阿曇族の祖神の生成と關係がある點では筑紫の方を起點とすることにも一つの理がある。唯ここでは一方に近畿を起點とした順路をも意識してゐる點を注意するにとどめよう。

伊邪那岐命の鎮座地は、前述の如く、淡海の多賀(古事記)、淡路洲(書紀)、又高天原の日の少宮ともいふ(同上)。次に天照大神と須佐之男命とのうけひは、天安河を中に置いて行はれたのであつた。この時の生成の神々は、筑紫の胸形君の祭神及び出雲族系の神々が多い。その記事の中に「日神の生れませる三女神を「筑紫洲」或は「葦原中國の宇佐嶋」に降らしめて、天孫を助け」奉らしめ云々とある。これらは、筑紫系、出雲系、神話の地理的地盤の問題として参照すべきである。

次に天照大神が最高絶対の神格としての光輝を示される天石屋戸隠れであるが、この條で殊に顯著なのは天安河と天香山（古事記では天金山の名も見える）である。天高市も書紀一書（第一）に見える。この時作つた鏡は紀伊國の日前神（書紀一書第一）とも、伊勢に崇祇る大神（同上第二）とも傳へてゐる。古語拾遺では兩説。

次に須佐之男命の出雲降りであるが、この須佐之男命及びその神奇の大國主神その他の關係する出雲神話の地名は暫らく別とする。（後章に述べる）

次に因讓に就て、高天原と葦原中國との折衝であるが、高天原の側では例の如く天安河が諸神の會集地であり、その上流が建御雷之男神とその父神の住地である。（古事記）折衝は出雲國で行はれ、建御名方神は科野國の洲羽海に追ひつめられた。

次に天孫降臨になると二つの面白いことが起る。第一は、猿田毘古神で、降臨を途中で迎へて、その「御前に仕へまつらむ」（古事記）といひ、又「吾先ちて啓き行かむ」といふにかゝはらず、（書紀一書第一）次の如き問答と結末が傳へられてゐる。

天細女復た問ひて曰く、汝は何處に別りまさむぞや。皇孫は何處に到りまさむぞや。對へて曰く、天神の子は則ちまさきに筑紫の日向の高千穂の榎觸の峯に到りますべし。吾は則ち伊勢の狹長田五十鈴の川上に到るべし。因て曰く、我を發顯しつるは汝なり。故れ汝以て我を送りて致すべし。（書紀第一）

かれここに天字受賣命に詔りたまはく、この御前に立ちて仕へまつれりし猿田毘古大神をば、専ら顯し申せる汝送りまつれ、またその神の御名は汝負ひて仕へまつれとのりたまひき。是を以て猿女君等、その猿田毘古の男神

の名を負ひて女を、狻女君と呼ぶ事是なり。(古事記)

要するに、狻田毘古神、天字受賣命共に伊勢に行つて居るのである。古事紀傳では、狻田毘古の「本郷ホトケに還りたまふなるべし。」といつてゐる。併し、伊勢の方へ行つてしまふことは、何といつても唐突の感を受ける。而もこの近畿地方は後に神武天皇の御東征に於ては東征さるべき地方、又不案内の地方であることを思ふ時、更に奇異の感が深い。とにかくここにも近畿地方の一地名があらはれてゐる。

第二に面白く思はれのは、天孫が、出雲國にも大和國或は近畿地方、或は淤能基呂島や、本州にでもなく、西陲の日向に降り給うた事實である。なぜ日向でなく、寧ろ大和地方へ降臨遊ばされなかつたか。とにかくこの降臨に關してから日向の意識が明確になる。天孫降臨以下は神武天皇の御東征まで地理的舞臺は暫く大和近畿を離れて南九州地方に在る。そして御東征にあつては、大和近畿地方は、前述の如く殆ど未知の地として、征討さるべき地方としてあらはれてくる。そして東征によつて、再び大和地方は高天原系の中心の舞臺となつてあらはれる。

以上、神話、——特に天孫降臨以前の神話の舞臺に於て地上界に關係ある地名を通覽するに高天原神話が、大和近畿地方中心の意識を反映してゐることが分明である。而も神武天皇の御東征御出立の際には、殆ど未知案内の地方として映つて居り、やがて東征によつて、いよいよ「天下の政をば平けく聞し」めし(古事記)、「天業を恢弘べて天下に光宅」し給ふ(書紀)大和朝廷の傳承の神話として見る時、この所謂神代神話に現はれる地名の多くが、神武天皇の「畝火之白檮原宮にまし／＼て天下治しめし」(古事記)たる大和なる人代を反映した意識が存することを認められる。そして、この大和中心の神話に對して、或は出雲、或は筑紫、日向の傳承との關係は、次に述べる勢力的關係

とも關聯して考へられねばならない。

(四)

神武天皇が「日向より發して」東のかたに「上り幸まして」「荒ぶる神等を言向けやはし、伏はぬ人どもを掃ひ平げたまひて、畝火之白檮原宮にましまして、天の下治しめし」(古事記)た御東征のことは、大和朝廷建立後最も強い記憶として傳承されてきた。もし單に傳承を功利的に合理化するためならば、初めから「六合の中心」(書紀)なる大和の天香山あたりに天孫が降臨あそばされたとなすこともでき得たであらう。例へば邇藝速日命は御東征以前に大和に天降つて居られたことになつてゐるのである。しかるにあくまで「日向より」御東征あそばされて大和地方を治めたまうたとしなければならなかつたのはその事實の記憶が強かつたのであると思はれる。神武天皇の妃は初めは日向の阿多族の阿比良比賣(古事記。書紀では吾平津媛)であつた。そして天皇崩後にこの妃の皇子當藝志美美命と、大和にてみあひ給うた皇后伊須氣余里比賣の皇子との間に御争ひの生じたことを傳へてゐる。要するに、日向から大和へ御東征あそばされて「畝傍の檮原に底磐之根に宮柱太しき立て、高天之原に搏風峻峙りて、始馭天下之天皇と曰し」(「天基を草創」(書紀)したまうたといふことは高天原御系の人代に於ける記憶であつた。

これに對して葦原中國の出雲系はといへば、先の地理的考察の場合に一部分を示したが、まづ出雲系の大立物たる大國主神の祖にして女舅にあたる須佐之男命の天降りが出雲國の肥河上であり、そこで得たまうた櫛名田比賣と、宮造るべき地を「出雲國に求ぎ」須賀で「八雲起つ 出雲八重垣」の御歌よみしたまうたことは餘りに有名である。一書(第二)によれば、安藝國の可愛の川上に降りたまうたともいひ、又新羅國に降り後に出雲國に到り、その子五十

猛神が樹種を筑紫より始めて、大八洲國の内に播殖したといひ、この神は紀伊國に坐すといふ。(一書第四)又、第五書によれば、唐郷の嶋にあつて、後に熊成峯に居り遂に根國に入り給うたと傳へてゐる。

次に大國主神については、出雲、稻舂、伯岐、木國、高志、などの國々が現れるが、その嫡後の須勢理毘賣命の姪に堪へかねて「出雲より倭國に上りまさむと」(古事記)されたことがあり、出雲系の關係國が、紀伊や大和地方に及んでゐることを示してゐる(松岡靜雄氏「紀記論究」参照)が、これは、更に次の傳承に一層明瞭になつてくる。即ち大國主神と力を合せて天下を經營した(記紀)少彥名命は、後に熊野の御崎から常世郷に行つたともいひ、淡嶋に至つて粟穀に彈かれて行つたともいふ。(一書第六)その後、又大國主神に協力した神は、自ら倭の御諸山に齋き祭れといつた。(記紀)この神裔の大山咋神は近江の日枝山、葛野の松尾に坐す。

さて天孫降臨に際しての葦原中國平定に高天原から遣はされた天若日子の死に關する阿遲志貴高日子根神についての傳承に美濃國の喪山の名が見える。(記紀)

葦原中國の國讓の折衝は前章に記したやうに出雲國で行はれ、大國主神はその國に鎮まられることになつた。

さらに、神武天皇の皇后伊須氣余里比賣は、前記大和の三輪の大物主神(記紀)、或は事代主神(一書第六、神武紀)の女であつて、倭の高佐士野に遊んで居られたのを婚したまうたのである。又かの御先導をなした八咫鳥は、新撰姓氏錄によれば神魂命の孫なる鴨建津見命が大鳥と化したものであり、古語拾遺も賀茂縣主の遠祖であるとし、又山城國風土記によつても同様で、このカモノ神は、迦毛大神(大國主神の子阿遲志貴高日子根神)などとも關係あるべくとにかく近畿地方の地理に明らかであつたのである。因に、熊野、賀茂等の地名は出雲にもある。(出雲風土記)

以上によつて出雲系の及んでゐる範圍が略わかる。注意すべきは神武天皇御東征以前に大和近畿地方に出雲系が足跡を明瞭に残してゐることである。

この出雲系は、筑紫の胸形の三女神と關係がある。即ち、この三女神は須佐之男命の御子となつてゐるが、これに大國主神が婚して、阿遲志貴高日子根神、八重事代主神や下光比賣シテホメを生んでゐる。(記・舊事紀參照)而して、葦原中國の國讓の時の高天原の使者たる天若日子はこの阿遲志貴高日子神と親しく、下光比賣を妻としたといふ。(記紀)この出雲・筑紫・高天原の三つの交錯は注意しておくべきである。この三女神の中、市寸島比賣命は安藝國の嚴島の女神である。

さて、次に日向に於いては、天孫は西陲の地に三代の間ましく、遍々藝命と大山津見神の二女神との傳承、種々出見命と海神の女との傳承がある。そして第四代の神武天皇に至つて東征の雄圖が起されたのである。

我々は假に、ここに日向・出雲(筑紫中國近畿北陸その他に互る)の二つの勢力のグループを考へることが出来る。そして神代傳承は、葦原中國の國讓といふ大事件を傳へて居り、それは天照大神と須佐之男命との争ひにまで遡つて反映してゐる。この國讓に關係したやうな事件は史實として時間的に人代以前の事だけであらうか。

國讓の交渉に當つた天若日子が、出雲と筑紫の結合たる下光比賣を妻として折衝を遲延せしめたことは、神武天皇が御東征に當つて、筑紫の岡田宮に御駐蹕になつたことと思ひ合はせられ、第二の御駐蹕地たる安藝の多祁理宮(書紀では埃宮)は、書紀一書に「素盞鳴尊安藝國の可愛あひの川上かみに下くだ到たります。」とあり、そこで大蛇を退治て靈劍を得、それを高天原に献ぜられたといふ傳承のある可愛川の川口に當つて居り、この川を遡つて、やがて山陰に通ふ要衝の

地である。大蛇の描寫は峽谷を表象して居り、靈劍は中國山脈の砂鐵と關聯すると考へてよい。かゝる要衝を扼した地に、古事記によれば七年間御駐輦遊ばされてあることを思へば、何らか出雲系との交渉の史實が伏在してゐることが察せられてくる。

愈々近畿に近迫遊ばされると、そこには長髓彦はじめ多くの土賊との交戦が傳承されてゐる。しかし、この地方にも亦元來出雲系の手が熊野の果まで伸びてゐた筈である。現にその一人の八咫鳥はその地理に詳しく、(記紀その他)伊須氣余理比賣ほか七媛女はのどけく倭の高佐士野に遊んで居られた。(古事記)又、大國主神は大和を、王牆内國と名づけてゐたといふ。(書紀)

大和朝廷創建の傳承には右に考察したやうな勢力的關係が又大きな骨子をなしてゐる。それが

伊邪那岐神と伊邪那美神との紛争 (黄泉國と日向)

天照大神と須佐之男命との紛争 (須佐之男命の葦原中國への神逐ひと天神の天上天下の照耀)

出雲國讓 (葦原中國の平定と、葦原中國への降臨。ここでも大國主神は「百足らず八十垆手に隠りて」(記紀)「幽事」を治め(紀一書)ることゝなつた

大和征定 (中洲の征定と定都即位)

の四様に現れて繰返されてゐる。そしてこの三者何れも、高天原系が絶対者として君臨したまふ事を傳承の骨子としてゐるのである。我々はここに大和朝廷神話の傳承の構想の基底に關して一つの暗示を得るであらう。

は一種意識的にこれを傳承上から抹殺しようとしてゐるけれど、それは却つて學問的不徹底不備による不安を示すにすぎない。「日本民族」は勿論多くの民族を統合して、有史時代にはすでに獨特の一民族たるのであることは學者のいふところで（例へば東京人類學會編「日本民族」をみよ）ある。出雲系の「國護」の問題は、日本民族の内部的問題として觀るべきである。言語的に言つても、「スサノヲ」「オホクニヌシ」を始め出雲系の祖神の御名は全く日本語的な名であつて、何ら異民族的な匂ひはない。その他の徵標についていへば、益々異民族の差が立て難い位である。別の機會に書紀撰者の杞憂を一掃したいと思ふ。

(五)

以上僅かに二三の點から大和朝廷神話の構想の問題にほんの準備的考察を加へてみたのであるが、勿論これだけでは未だ十分整理されてゐない。寧ろ未整理のまゝで問題を提供するにとゞめたい。又、本論の目的が神話の含む史實の詮索をなしてゐるかの印象を與へるであらうが、勿論その點についても、新しい提言をなしたことを自覺してゐるけれども、それも未だ結論を與へたのではない。私は、大和朝廷神話が一つの傳承として成立し發展したものであるといふ動的な觀方を具體的に實證してみようとしたのである。しかしこれだけの紙數では、さういふ動的なものであるといふことを暗示する程度に論證し得たにとどまる。即ち現在する記紀などの文献は、遙かな後代の傳承的特質を強くもつてゐるものであり、我々はそれからさかのぼつて、傳承の移變し來つた幾段階の跡を學問的に論究し得ること、又僅かなこの小論に於てもその段階に於ける姿が臚ろげながら現はれてきてゐること、これらをもつと精細縱横につきつめて行くところに悠遠の古昔から今日に至るまでの日本神話の發展圖が描かれるであらう豫想を得ることも

できる。尙ほ、つけ加へて言へば、我々は、日本神話を神話として観るためには、少くも時代的にはかの「同殿同床」時代の傳承にまで還元してかゝる必要がある。そしてそれも全く不可能なことではない。このために、神話學の方法は、單に古代への還元によつてのみではなく、或は民間の傳承に於て、或は日本に於て最も古傳承を傳へられてある朝廷の傳承についても、最も多く求めらるべきである。かくして、古神話の姿が動的に描き出されると同時に、そこに眞に神話の構想といひ得べきものが見出されてくるし、眞に日本神話の哲學的特性も亦見出されてくるものである。